
少年陰陽師～永遠に続く誓い～

宵千鬼江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年陰陽師／永遠に続く誓い

【NNコード】

N2977Z

【作者名】

宵千鬼江

【あらすじ】

晴明と昌浩が現世をさつてから1000年余りが過ぎた。この二人に心を開いていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、再び心を閉ざしていった。晴明と昌浩の願いで今だ安倍家に仕えているものの、紅蓮の神氣の強さにおびえる者ばかりだったからだ。そんな紅蓮を、道反の大神と知り合いだつたため、時折現世に降り立ち、術を使うことで許された晴明と昌浩は心配しながら見ていた。しかし一向に紅蓮が心を開かないので、晴明と昌浩は道反の大神に頼み込み、術を使って昌浩を現世に戻すことにした。

しかし、安倍晋三は再び現世に生を受けた。

再会（前書き）

初兆戦です。少年陰陽師の一次創作。途中で挫折するかもしませんが、よろしくお願いします。

再会

異界に閉じこもっていた十一神将騰蛇こと紅蓮は、背後に神氣を感じた。

「勾、何の用だ。」>

「なんだ、用が無ければ来てはだめなのか?ここは私たちの異界だぞ」>

「用はないのか。」>

「昌明に子供が生まれた。見に行つてみる。」>

「どうせおびえて泣くに決まっている。」>

「行くだけ行つてみる。あいつの靈力が珍しくてな。青龍まで見に行つている。」>

「青龍まで?わかつたよ。行けば気が済むんだな。」>

「そうだ。」>

仕方なく、紅蓮は人界に顯現した。その部屋ではぐっすり寝ている赤子を取り囲んで十一神将がいた。

紅蓮が顯現したことに気がついた十一神将たちは紅蓮が予想していた通りの反応をした。

太陰は隣にいた百虎の後ろに隠れ、青龍は即座に異界へ戻った。多少態度が軟化したものの、1000年前から十一神将たちの紅蓮に対する接し方は変わらない。それら全ての反応を黙殺した紅蓮の背後にまたもや神氣を感じた。

「勾、帰つていいか?」>

「まだ赤子を見てないだろう。見てたらお前はそんなことは言わない。・・・・・ほれ。」>

「お、おい?赤子は嫌いだとあれほど・・・・・」>

「その靈力、懐かしくないか?」>

「・・・・!昌浩の靈力にそっくりだ。」>

「そうだ。泣いてもいないうだろう」>

< - ! >

心底驚いている紅蓮を見ながら、十一神将たちも同じことを考えていた。

そこに、昌明が来た。

< お、昌明、この子の名前はなんと言つんだ？ >

< あ、勾陣、十一神将の皆様もおそろいで。 >

紅蓮を恐れている昌明は言葉遣いに気をつけながら、赤子の名前を言つた。

< 昌浩と。 >

< くくくくくは？ > > > > >

< くくくえ？ > > > >

異口同音に声を上げる十一神将たちの後ろで、紅蓮は声も上げられぬほど驚いていた。

親ばか（前書き）

少し前置きが長くなってしまった。少年陰陽師、めげずに一作
目です。

親ばか

昌浩の世話をしていた紅蓮は、1000年ほど前に想いを馳せていた。名前も同じ、靈力も同じ、もしかしたらこの子は昌浩の生まれ変わりではないかと十二神将は期待していた。しかし、陰陽術を教えようにも今は平成、術など必要ないからと最近は術を受け継ぐことをせず、見鬼の才だけが受け継がれている状態になつており、十二神将も呪文を知つても使うことはないので術の発動の仕方を教えることはできなかつた。悩む十二神将の中でただ一人、ここにいてくれればそれでいいと、紅蓮だけが昌浩を親のように世話していた。

「どうしたんだ昌浩、そんな顔して。」>

「れ～ん、ボ～つとしてた。だいじょうぶ?」>

「ああ、すまない、大丈夫だ。」>

「れ～ん、れ～ん、そといこ。」>

「外? 危なくないか?」>

そこに、勾陳が顕現した。

「私とお前がいれば問題ないだろ?」>

「それでいいのか?」>

「闘将が一人だぞ! ? この時代は害をなす妖怪なんぞそういうない。大丈夫だ。」>

「でも万が一ということも・・・」>

「大丈夫だ。そういういつてる間に昌浩が出て行くぞ。」>

「何! ?」>

見ると、昌浩が裸足のまま外へ出て行こうとしていた。

「昌浩、勝手に出て行くんじゃない。驚いたじゃないか。」>

「れ～ん、あそぼ。」>

「わかつたよ。」>

昌浩に引かれていく紅蓮を見ながら、勾陳はつぶやいた。

くまつたく、親ばかにもほどがあるな。>

勾陳の独り言にその場に隠行していた十一神将たちは大いに頷いた。

親ばか（後書き）

誤字脱字、あつたら教えて下さい。途中で訂正したりするかもしだせんが、その辺はお願いします。

お年（前書き）

二作目。まだまだげずに頑張ります。

昌浩が生まれてから5年がたっていた。この時代の七五三だ。七五三を終えてお疲れの様子で帰ってきた昌浩は部屋で紅蓮と休憩していた。

「ぐれん、あれなに？あれだよ、あのくろいの。」

「昌浩、あれが見えるのか？」

それはとても力の弱い妖怪で、相当の見鬼の才がなければ見えないぐらいの雑鬼だった。

「え？ だつてあそこにいるじゃない。いないの？」

「いや、いるにはいるが……」

そこに、十一神将勾陳と六合が顕現した。

「昔の昌浩みたいなことになつてているな。」

「勾か。ああ、しかし今回は見鬼の才を封じる術はないぞ。」

「そうだな、昔なら晴明に頼めたんだがな。」

そこに、ずっと黙つていた寡黙な十一神将、六合が口を挟んできた。

「別に封じる必要がないだろ。今は昔みたいに妖怪が闊歩しているし、万一いたとしても騰蛇がいれば大丈夫だろ。」

「それもそうだな。だが騰蛇なら俺一人では心配だなどとほざきもうだ。」

「おい勾、どういうことだそれは。俺一人では心配だらう、どう考
えても。」

「お前は十一神将最強なんだから大丈夫だろ、どう考へても。」

「俺は勾陳に賛成だ。」

そこに、ずっと隠行していた玄武が顕現してきた。

「我也勾陳に賛成する。それでも心配なら六合と太陰と一緒にいてもらえばいいと思うが。」

そこに名指しされた太陰が慌てて顕現してきた。

「ちょっと待ちなさいよ玄武、六合はともかくなんで私なのよ。勾

陳が行けばいいじゃない。 >

<風流と風読みに必要だ。 >

<だつたら百虎でもいいじゃない。 >

<太陰の姿かたちは子供だ。 昌浩に近い。 >

<で、でも・・・・・>

紅蓮が恐い太陰は必死にげよつとする。それを見かねた勾陳が折
れた。

<わかつたよ。私がつくよ。 >

結局、昌浩のお供は勾陳と六合に決まった。

お供（後書き）

誤字脱字、気付いたらお知らせください。

小学校（前書き）

少年陰陽師一次創作4作目。まだまだげずに頑張ります。

小学校

昌浩は今年で6才、今日から小学校に通つゝとなる。重いランチセルをもつて、昌浩は白い物の怪と共に家を出た。

「もつくん、行こ。」>

「おひ。」>

「もつくんさあ。」>

「ん？」>

「学校ではあまり目立つ行動しないでよ。見鬼の才がある人がいたら大変だから。」>

「大丈夫だつて。俺が見えるくらいの見鬼はそういうないから。」>

「でも、勝手な事されると気が散るんだよね。」>

「大丈夫、大人しくしてるつて。」>

「絶対だよ。」>

そして、学校が始まり、最初の授業。

「はい、ここがわかる人。」>

「はい。」>>>

安倍家でさつさと知識を神将たちに叩き込まれていた昌浩には朝飯前の問題だった。と、そこに物の怪の合いの手が。

「こんなの昌浩にはどーつてことない問題だろ。別に手を上げる必要ねーんじゃねーか?」>

「そんなことないよ。授業なんだからちゃんとやらなきゃ。って言うかもつくん、机の中から出てこないでつてば。」>

「いいじゃねーか。どーせ俺が見える人はいないんだし、お前が小声で話せばばれねーつて。」>

「そういう問題じゃないの。」>

「じゃあどういう問題なんだよ。」>

「俺の気が散るんだよ。呼ばれてるのに気付けなかつたりしたらどうしてくれるんだよ。」>

<そん時はそん時で怒られておけよ。>

<怒られんのは俺なんですけど。>

<知るか。>

<ちょっと安倍君ー わから呼んでるんだけど。何ボウっとして
るの?>

<す、すいません。>

<あなたはボウっとしてることがよくあります。後で私のところへ来
なさい。>

<はー・・・・。ほら、怒られたじゃないか。今回で何回目だよ。>

初授業だつてのに。>

<俺は知らねーぞ。お前の集中力の問題だ。>

ちよつともっくん!ー!と叫びそうになるのを我慢して、畠浩は物
の怪に半眼を向けたが、当の物の怪はとこつと、前足で器用に首の
周囲をワシャワシャとかき回していた。

小学校（後書き）

誤字脱字あれば教えて下さい。

卒業式（前書き）

まだがんばれやつです。 5作目。

卒業式

昌浩は今日は待ちに待つた卒業式。今日で「ランドセルを持つて小学校に登校するのは最後。相棒の物の怪のもっくんはもちろん、十二神将六合、勾陳、天一と、昌浩の父親の昌明と母親の露奈がついてきた。

「今まで長かったな。俺は嬉しいぞ。弟子が独り立ちするみたいで。」

「弟子入りした覚えはない！」

「だから例えだよ例え。」

「どんな例えだよ。」

そんなやり取りを見ていた勾陳と六合は物言いたげな顔で見守っていたが、口を挟むことはしなかった。

「キンコーンカーンコーン卒業生の皆さんは至急体育館にお集まりください。キンコーンカーンコーン」

「だつてよ。行つたほうがいいんじゃないのか？」

「そうだね。でももつくん、式にまでついてくる気？」

「大丈夫だつて。俺が見えている人なんかそうそういなつて。」

「それはそうなんだろうけど。絶対にいないとも限らないし。」

「だつたら勾と六合も同じだる。」

「あの二人は常に隠行してるしもし顕現したとしても服装が変わつてるので少し変な人にしか見えないって。・・・多分。」

その後に多分ということを入れたのは、誰がどう見てもあの服装と背とその他諸々は人間に見えないからである。

「まあ、人じやないしな。」

「そりなんだよね。」

そういういつてる間に体育館に着き、式も始まった。式の時々に物の怪が横で騒いでいるのを除けば、式は無事に終わった。1ヶ月後には昌浩も中学生である。

卒業式（後書き）

誤字、脱字、あれば教えて下さい。

覚醒（前書き）

やっと目覚め覚醒です。六作目、少しこなこです。

昌浩は明日から中学生である。昌浩は相棒の物の怪と十二神将勾陳、六合を連れて貴船の本宮を田指していた。それも真夜中に。安倍家では、子供が中学生になるとなぜか真夜中に貴船の祭神にご報告するという儀式があるからです。

「えーと、私は明日より中学生になります。加護をお願いします。」
「えーとつて何だよえーとつて。相手はへそを曲げたら厄介な神5指に余裕ではいる神なんだ。」
「騰蛇、それをここで言うのも控えたほうがいいぞ。」

そんなことを言っている昌浩、物の怪、六合、勾陳の話し声をさえぎるよう、「山の反対側から爆発音が聞こえてきました。」

「なんだ? なんなの、今の音?」

「わからん、わからんが行つてみよう。」

「う、うん。」

それだけの会話を交わして、昌浩と勾陳と六合と物の怪は山の反対側に急いだ。そこでは、妖力はさして強くないものの、数がとても多い妖がうろうろしていた。その数の多さにさしもの十二神将も絶句した。

「昌浩、お前は下がつていい。」

「う、うん。」

それだけの会話を交わすと、物の怪は瞬く間に長身の青年に変化した。この青年こそ十二神将最強にして最凶の騰蛇。また、許されたものにだけ呼ばせる名前は、

「紅蓮」

紅蓮は目で応じると、妖の所へ駆けていった。勾陳と六合も同様だった。三人の神将は次々に妖をなぎ倒していくが、数の多さにきりがなかつた。どれほどそうしていたか、妖が不意に三闘将の間をすり抜けて、昌浩に襲い掛かつた。

くくくしました。>>>

しかし、この距離では絶対に追いつかない。三闘将があせる前で、不意に昌浩は瞠目して、倒れかけた。おかしい、妖はまだ手をだしていない。急に昌浩はシャンとたつたと思うと、訝る紅蓮、勾陳、六合の前で、教えてもいない刀印を結んで、教えてもいない真言を唱え始めた。

「オン、アビラウンキヤン、シャラクタン！ナウマクサンマンダ、バサラダン、カン！」

妖に無数の亀裂が生じた。昌浩は刀印を構えると、一気に叩き落した。

「降伏！」

妖の体が木つ端微塵に砕けて四散する。それを見た無数の妖達が一目散に逃げて行つた。三人の神将は、息を呑んだ。が、すぐに気を取り直して昌浩に詰め寄つた。

「どういうことだ、なぜ教えてもいない陰陽術を使えるんだ。答えろ、昌浩！」

「いや、そんなこといわれても俺説明苦手なんだって。」

さらに問い合わせようとした三闘将の真上に、絶大な神気が降り立つた。みると、そこには白銀の龍が人身を取つているところだつた。この方こそが、貴船の龍神である。

「ほおう、ようやく目覚めたか。安倍昌浩。」

「はい、お久しぶりです。高於の神。」

紅蓮たちは訳のわからないままそこに呆然と立つていた。目覚めたとはいつたい、それよりもなぜ高於の神の名を知つている。

「どういうことだ、俺達の納得のいく説明をしろ。」

「だからおれ説明苦手なんだって。」

「ならば私が説明しよう。」

神将たちはまたもや啞然とした。この声は、いや、そんなばかな、だつてあいつは1000年以上も前に・・・だが、そんなことを考えていた神将たちの思考を昌浩の一言が打ち消した。

<じい様。>

神将たちは、その姿を見て絶句した。が、その姿は紛れもなく神将たちの最初の主だった。

<<< 晴明！ ! ! >>>

覚醒（後書き）

誤字脱字、あれば教えて下さい。

俺のため（前書き）

また長くなつてしましました。7作目、開幕です。

俺のため

十一神将たちは唖然としていた。まず何かしら雰囲気が変わったと思われる昌浩、傷だらけで上の空の三闘将たち、そして1000年以上前に死んだはずの彼らの最初の主、晴明。なぜか横にいる貴船の祭神をほつとしても不可解なことが多い。

<これはどういうことか説明してくれ、騰蛇、勾陳、六命。>

<上の空の紅蓮を引き戻したのは、困惑が少し少ない天空だった。>

<わからん、俺達だつて不思議なんだ。>

<それはそうだろうな。だから私が説明すると何度も言つてるだろ。>

<なら早いとこ説明してくれ。頭が爆発しそうだ。>

<はいはい、じゃあ、皆が座れるところ・・・リビングでいいですよね、じい様。>

<ああ、別に構わんぞ。>

<じやあ行こう。>

<あ、ああ>

訳のわからないまま十一神将たちはリビングに誘われていった。

<え~と、まさしくこの昌浩は昔の昌浩の生まれ変わりだ。>

<そりなのかな。靈力が同じだからそういうじゃないかとは思つてたんだがな。>

<そうだ。だが私は黄泉から魂魄を飛ばしているから実態ではないぞ。だから姿も二十代の頃のものだろ。>

<その姿になる必要あつたんですか？確かに実態で降りることも許されませんでした？>

<そりなんだが、この姿をとるのが夜に出る時の癖になってしまったな。>

<ちょっと待つた。許されたって誰にだ？>

<道反の大神。ほら、俺達道反の大神の知り合いだつただろ。だから

ら時々現世に降りたり、術を使うことまで許してくれたんだ。だからもつくん達のこともずっと見てたんだよ。>

「唖然となっていた十一神将たちはまた一段と増して唖然とした。」

「こらこら、そんなに驚くんじゃない。まあ、今まで姿を見せることだけは禁じられていたしな。」>

「今日は何の日なんだ？」>

「昌浩が覚醒する日だ。私の術で昌浩の記憶を一時的に消していたんだよ。生まれたばかりの赤子が突然お前達のことを言つたりしたら驚くだろ。それが解かれるのが今日だつたんだ。それが解かれた姿も見せていいと言わっていたんだ。」>

「それにしてはいいタイミングで妖があらわれたな。」>

「ああ、あれは高於の神どどうせ昌浩が覚醒するなら面白いほうがいいと話し合つて決めたんだ。」>

「ちょっと待て、そのせいで俺達は傷だらけになつたつてのか？」>

「明らかに半眼になる物の怪に晴明は飄々と言つてのけた。」

「やうだよ、普通に昌浩が教えてもない陰陽術を使つたら驚くだろ。」>

「驚くよ、驚いたからこりつして問い合わせているんだろ。」>

「そうだな。ということで、昌浩は昔の昌浩だし、私はちょくちょく顔を出しに来るから。こちいち驚かんくれよ。」>

「慣れたら大丈夫だ。それより、そもそもどうしてお前達は昌浩を甦らせたんだ？」>

「それは、もつくんが落ち込んでたからだよ。それで心配になつてじい様の術で現世に戻つたんだ。」>

「昌浩は物の怪の白い毛並みをなでた。十一神将は大体事情がわかっていていつも平静を取り戻しつつあつたが、それとは対照に物の怪は絶句してされるがままになつていた。俺のため？」

「ところで、高於の神はどうしてここに？」>

「面白そだつたからだよ。とうの昔に死んだはずの安倍晴明が本宮に来た時には驚いたがな、事情を聞いて面白そだから安倍晴明

とあの策を練つたんだ。あの妖も私とこれが脅して従えさせたもの
なのだよ。>

<ちょっと、私を入れないでくださいよ。全部あなたがやつたので
はありませんか。私は見ていただけですよ。>

そんな会話を最後に、晴明と高於の神は帰り、覚醒したばかりで疲
労気味の昌浩は床についた。

俺のため（後書き）

誤字脱字、あれば教えてください。

神将会議（前書き）

なんだか最近長くなつてばかりの気がします。すいません。もう少ししたら戦闘も開始しようと思いますが、今だ話がまとまりません。もうしばらく短編？みたいな物になります。あしからず。前書きも長くなつてしましました・・・では、8作目、開幕です。

神將会議

晴明が帰つて昌浩が床についたのを見届けた十一神将たちは珍しく異界にて会議をしていた。その中にはいつもは必ず物の怪の格好で昌浩のそばにいる騰蛇こと紅蓮もその場にいた。

「昌浩のそばにいなくていいのか？騰蛇。」>

「あいつが陰陽術を使えるなら問題はないだろ。」>

「それもそうか。それより、今回のことどうするんだ？」>

「どうするといわれてもさあ、私まだ事情が飲み込めてないんだけ
ビ。」>

紅蓮と勾陳の話をとめたのは甲高い太陰の声だった。他の神将を見回すと太裳と玄武も同様のようだつた。

「つまりだな、今安倍家の家の一部屋でグーすか寝ている安倍昌浩は昔の安倍昌浩の生まれ変わりで、それは晴明の術をもつてしてなされたことだつたと、そういうわけだ。」>

「え、でもじゃあなんで晴明はこの現世に来たの？」>

「それは昌浩が覚醒するのが今日だつたから心配なので見に來たといつ所だらうな。」>

「おい、ちょっと待て勾、心配だつたら妖を差し向けたりするか？
普通。」>

「お前、根に持ちすぎだ。ああいう男なんだよ安倍晴明は。」>

「ねえ、妖を差し向けられたつてどういうこと？」>

「ん？ああ、太陰は知らないんだな。話してもないしな。晴明は高於の神とつるんで私らに妖を差し向けたんだ。覚醒した昌浩を間近で見せて驚かすためにな。」>

そういう勾陳の神氣は言葉をつむぐ度に刺刺しさを増していた。それを感じた太陰を始めとする神将たちは後ずさつていった。ただ1人を除いては。

「おい、勾。お前も根に持つてゐるんじゃないか。皆離れて行つてる

ぞ。>

その一言で我を取り戻した勾陳の神氣は徐々に納まつていった。

<すまない。思い出したらつい。>

神将たちは少しづつ勾陳と紅蓮の元に戻つていった。が、太陰だけは戻りそうになかった。玄武と百虎が太陰を慰めていたが、半泣きの太陰は一步も動こうとしなかった。恐くて動けなかつたのかもしれないが。

<晴明はちょくちょく顔を出すとか言つてるが昌明たちは驚かないのか？>

<そらまあ、驚くだろ。見知らぬ者がいきなりすました顔で現れたら驚くだろ。それに、明日霧囲気の変わつた昌浩を見ても驚くだろうよ。>

<そうか。昌浩が説明してくれるのか？>

<しないかもよ。我々が問い合わせても説明は苦手などといつていたからな。>

<そうなると説明するのは俺らか？>

<そうなるな。おい、騰蛇。お前は昌明に説明を頼む。私は露奈に説明するから。>

<はいはいだが昌明は俺のことを恐れてるぞ。>

<なら太陰、お前がやつてくれ。>

<ええ！？何で私が？>

<なんとなくだ。>

<はあ！？・・・もう、わかつたわよ。>

落ち込んでた太陰を慰める勾陳の作戦だと気がついたのは太陰以外の十一神将全員だった。

<げ、もう朝だぞ。異界にいたら時間がわからなくなるのが難点だな。晴明たちも起きてるぞ。昌浩はまだのようだが。>

<じゃあ、俺は昌浩をたたき起こしてくるとするか。まったく、今日から中学生だろうが。>

そんなこんなで久方ぶりの神将会議は終わりを迎えた。

神将会議（後書き）

読みでいただきありがとうございます。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

祖父と兄は同一人物（前書き）

今回も長くなってしまった。これからずつと長くなるかも知れません。

そういうわけで、9作目、開幕です。

祖父と兄は同一人物

昌浩は朝つぱらから物の怪に叩き起しだれて機嫌が悪かった。
「まつたぐ、まだ4時だつてーの。出発は7時。」
「そう怒るなつて。昌明が怪しんでるだらうから説明してくれたら
なと思つてな。」
「いやだよ。もつくんが説明してくれたらいいじゃんか。」
「俺は・・・嫌だ。」
「なら俺だつて嫌だよ。」
「そついわづに説明してやつたらどうだ?」
昌浩と物の怪は突然降つてきた声にとても驚いた。
「じい様、脅かさないでくださいよ。つて言つかなんですか朝つぱ
らから。父上になんていつたらいいんですか。父上から見たら見知
らぬ青年ですよ?」
「そつだな。昌明には後で説明してやるとして今日はお前の入学式
なのだろ。私も行こうかと思つてな。」
「ちよつどじい様!? 何考えてるんですか?じい様は靈なんですよ
!?」
「大丈夫だよ。ちゃんと皆にも見えるように術を施すから。」
「そついう問題ではありません!俺の家族にじい様はいないという
のが世間の認識なんですよ?じい様が式に現れたらなんと詰め寄ら
れるかわかつたもんじゃありません!」
「それも大丈夫だよ。お前に関わる者全てに術を施して私はお前の
兄ということにしておいたから。」
昌浩は絶句した。兄、兄、兄つて。じい様が兄?何でそうなるの?
「ちよつと待てよ晴明。お前まさかだから魂魄を切り離してきたの
か?」
「それ以外に何がある?」
「・・・・・・・・・・もついい。」

物の怪はそれっきり沈黙してしまった。対する畠浩はまたもや晴明に質問を投げかけている。

「なら、父上と母上にも同じように術を施したんですか？」

「いや、晴明と露奈は本当のことを言つたほうがいいだろ？ 家族だからいつ気付くかわからん。」

「そうですね。」

「ところで畠浩。」

「はい？」

「お前、昔から父上、母上と呼んでいるのか？」この時代は皆お父さん、お母さんと呼んでいるそうじゃないか。」

「え、この家の中だけでしか父上、母上と呼びません。外では皆と同じようにお父さん、お母さんと呼んでますよ。やうしつけられましたから。」

「ならわしのことも家ではじ一樣、外ではお兄さんと呼び分けることは可能だろ？」

「そのために聞いたんですか？」

「もうだよ。」

「……いつもですか。」

畠浩も物の怪と同じように沈黙してしまった。そんな畠浩を面白そうに見つめていた晴明は、やっと立ち直ったと思われる畠浩と物の怪に問いかけた。

「では、私が式に出ることには文句ないな。」

「術を施しているのなら大丈夫でしょう。ねえ、もつくん。」

「ああ、大丈夫だろ。六合や勾などみな説明してくれよ。問い合わせられるのははじめんだぞ。」

「わかった、わかった。」

それから晴明、畠浩、物の怪の三人は家族に事情を説明するべく、

部屋を出て行った。

祖父と兄は同一人物（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2977z/>

少年陰陽師～永遠に続く誓い～

2011年12月20日16時45分発行